

いったし、傾聴する場にもなりました。吉里吉里地区の方も子連れで来られました。

お医者さんは、人の命を救うために診察し、薬を投与されます。しかし、私達ボランティアは、専門家ではありません。苦しみを分かち合うのが役割でしょうか。ボランティアのリピーターが、「あれがあったらいいね」という提案を受けて、何千人の人々の力で作り上げてきたのが、「まごころ広場」だと思います。

昨年7月末、午後5時頃、70歳代の女性我広場にやって来ました。「広場」が開設されてからは、「ここでは、何時でもボランティアさんが私の話を聞いてくれるので、私は、ここでリラックス出来るのです」とおっしゃいました。この話は、私(白澤)の疲れを吹っ飛ばすに十分なものでした。コミュニティの原点を教えてくださいました。建物がなくても、いつもそこに行けば誰かが話し相手になってくれる事でコミュニティが出来る事を教えてくださいました。

ハード部隊の瓦礫撤去は、今後、地域のお祭りの手伝いや地域の人々へのサポートが中心になっていくのではないのでしょうか。地域作りこそ、我々の活動の中心になっていくでしょう。

国内で活動するボランティア団体の中には、名前を売るために活動している団体もあります。

「私達は、被災地でこんな活動してきました」と宣伝手段にしています。被災地の皆さんが、「何を望んでいるのか」を把握し、その実現のために手助けするのがボランティアではないでしょうか。プレイヤーは、被災者で、ボランティアは観覧席にいるか、時には、コーチャーズ・ボックスで、「こうしたらどうでしょうか」と助言をし、応援するという立場ではないでしょうか。

大槌町は、400人以上の行方不明の方々が

られ、2140戸の仮設住宅があり、5000人近い人々が仮設住宅に住み、在宅被災者やみなし仮設の被災者がおられます。私自身は、「被災者なのか、ボランティアなのか」と質問されるのですが、自分は、神仏に生かされた1人として「これしか、自分にはできない」というつもりでやっています。

被災者の心情は、複雑です。例えば、

「AKB48」の方々が来られた時の事です。ある人が、「可愛わねえ」とおっしゃいました。すると別の人が、「いや、うちの娘の方が可愛かった(過去形であることに留意:三好)」と言われます。

以前上町地区で幼児と思われる黒こげの遺体が見つかりましたが、今も身元が判明してないということを経験関係者から聞いた事があります。そうすると、イベントをやるのも配慮が必要ですし、躊躇する事もあります。

昨年8月に、「亡くなられた方々の霊を弔う」という趣旨で「三陸海の盆」というイベントを西岡さんが、中心になって行われました。初めは、釜石・大槌の4~5団体が出演するという事でしたが、合計9市町村12団体が出演することになりました。

最後に「物資」についてです。現在は、バザーをやっても、翌日には、目の前のゴミ箱が一杯になる、というのが実情です。ところが、物資配布を、必要とする方々も多数おられます。それで、今は、「遠野まごころネット生活支援隊」等を通じてピンポイントで持参する、というのが実態です。物資配布は必要ですが、配布方法を検討すべきだと考えております。

本日は、傾聴して頂きありがとうございます。
(おわり)

筆記・再現・文章責任：三好 惇二

(なお、白澤さんに校正をお願いし、許可を
頂いた上で、掲載しております)